

標本作製法

薬品を使わない魚類の骨格標本の作り方

駿河一郎（ふじミュージーサポーター）

今までの骨格標本は、肉などを取った後、湯や薬品を使い、温度や薬品濃度により、バラバラになったりする。薬品により骨は白くなるが、時には骨が崩れて、位置が分からなくなり、組み立てが大変である。

子供たちが、標本を作るには、危険な薬品などの作業を無くし、組み立てなどが複雑にならない方法はないものかと、以前より考えていた。

魚の骨には、骨と骨の間に薄い膜の結合部分があり、薬品では膜が溶けてなくなってしまう。自然体の魚標本ではなく、骨骨（ホネホネ）の魚標本であり、この膜がなくては、魚らしい標本にならない。

魚の目も残したい部分の一つである。元来ないものが多い。目の部分は乾く時、形が変化する。目が完全に乾く前に、マチ針を刺し、形を修正する（写真1）。注意：早すぎてもダメ。

目があるとないのとでは、魚の顔に差が出る。目の周りも、肉がかなり付いているから注意したい。

魚の皮を取るには、ピンセットのロック付き（手術用）を勧める。単純作業で、肉や皮をはぎ取っていく。魚を水槽に入れ、浮いてくる物を、ハサミとピンセットで切っていく。この作業の出来具合で、仕上がりが変わっていく。

その後、ハブラシ等で魚をブラッシングをし、綺麗にする。この作業は何回も繰り返す。これらの作業後、魚をマットなどの板に乗せて型を整形する。マチ針で固定しながら進める。徐々に魚の形らしさが出来上がる。その後、乾燥には扇風機を使い、3日から一週間以上かける。乾燥したらケースなどに入れて完成。

薬品を使用していないので、黄色に変色するが、白くなくてもいいのではと思っている。魚の部品が、完全に残っていればいいのでは。

手作業の為、時間がかかり大変であること

や、骨が黄色く変色するのが欠点でもあるが、骨と骨の間の膜に毛細血管が見える魚もあり、この方法でしかできないことかもしれない（写真2）。

作り方

使用用具（写真3）：小型ナイフ・まな板・ハサミ・ヘラ（竹製・金属製）各中小・ピンセット（ロック式、手術用など）・小型水槽・キッチン洗剤・ハブラシ・ドライヤーもしくはミニヒートガン・マット（発砲スチロールなど）・まち針・骨乾燥のためのハンガー式道具・扇風機・ワイヤーブラシ

手順

1. 小型ナイフを使い、三枚におろす。調理作業と違い深く入れすぎ、骨を切らないよう注意し、皮をカットした所に手を入れ、骨中心に残すため肉を避けながら分けていく（写真4）。

2. 肉を竹べら・金属べらで取る。魚により、道具を色々替える。

* 金属へらは力が入りやすく、魚の膜に穴を開けることが多いので注意。

3. 水槽に、骨とキッチン洗剤を入れて30分位置いた後、歯ブラシ等でブラッシングする。* 魚の膜に注意。

4. 数回、水洗する。

5. 取れていないところの肉や筋などを除去する。

6. 3～4を繰り返す。

7. 水槽に水を入れ、骨から浮き上がってくる肉や筋などをすべて取る（写真5）。

8. 3～4を繰り返す。

9. 頭の皮はピンセットを使い剥いでいく。皮をピンセットで丸めて取ることもある。この下にも肉などがあり、取る（写真6）。

10. 取った後、ブラッシングする。

11. 3～4を繰り返す。

12. 皮が取れないとき、ドライヤーの温風を使い、少しずつあてて取っていく（写真7）。* ドライヤーを当てすぎると骨がバラバラになるので注意。

13. 3～4を繰り返す。

14. マットに載せて魚の形を作り、マチ針で止める（写真8）。*魚の形はここで決定するので注意。

15. マットを扇風機の前にセット、魚の上下を入れ替えながら乾燥。

16. マットを外し、又乾燥する。魚の左右両面に風を当てる。3日から1週間以上続ける。*魚により乾燥時間が変わるので、注

意してよく見ること！

17. 魚の目に注意：乾燥時変化が大きいので注意すること。乾燥しすぎると直しがきかない。目が固まる前に、マチ針で修正するがこれが大変で、この目一つで魚の顔が変わる。早すぎると水が出てしまうので注意。マチ針も刺さりにくく変形しやすい。

18. 乾燥して完成。ケースなどに入れる（写真9）。



写真1



写真2



写真3：使用道具



写真4



写真5



写真6

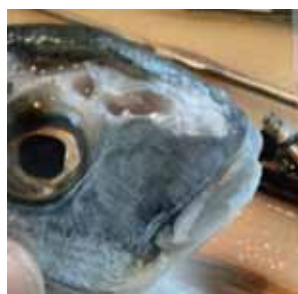


写真7



写真8：マチ針でマットに固定。



写真9：完成